

臨牀 消化器内科 第 33 卷 ● 総目次

Vol. 33 / No. 1 ~ No. 13
(2018 年 1 月号 ~ 12 月号)

特 集

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|----------------------------|
| No. 1 | NASH 2018 [特大号] | No. 8 | 大腸腫瘍治療後のサーベイランス |
| No. 2 | 自己免疫性膵炎(AIP) | No. 9 | 膵神経内分泌腫瘍 update |
| No. 3 | GERD 診療 2018—現状と課題 | No. 10 | 十二指腸上皮性非乳頭部腫瘍の診療を巡って—現状と課題 |
| No. 4 | 慢性便秘—新たな分類と病態・診断・治療 | No. 11 | 消化器病漢方治療—理論と実践 |
| No. 5 | 緊急内視鏡の適応と実際 | No. 12 | 消化管粘膜下腫瘍(SMT)の診療 [特大号] |
| No. 6 | ガイドラインに基づいた肝臓診療 | No. 13 | 肝線維化—診断を超えて |
| No. 7 | 膵癌 update [増刊号] | | |

●Vol. 33 No. 1 NASH 2018

- | | | |
|------------------------|---|-------|
| 巻頭言 | 小池 和彦 | 7~8 |
| これからの肝臓病診療と NASH | | |
| 1. NASH・NAFLD の疫学 | 川口 巧・鳥村 拓司 | 9~16 |
| 2. NASH の診断—アルゴリズムと問題点 | 杉本 和史・竹井 謙之 | 17~23 |
| 3. NASH の病理所見 | 全 陽 | 25~30 |
| 4. NASH・NAFLD の画像による評価 | 小林奈津子・飯島 尋子
吉田 昌弘・西村 貴士
西口 修平・廣田 誠一
近藤礼一郎・矢野 博久
鹿毛 政義 | 31~36 |
| 5. NASH 診断のバイオマーカー | 角田 圭雄・鎌田 佳宏
米田 正人・小野 正文
江口有一郎・米田 政志 | 37~43 |
| 6. 糖尿病と NASH・NAFLD | 添田光太郎・植木浩二郎 | 45~52 |
| 7. NASH の遺伝的素因 | 岡上 武 | 53~60 |
| 8. NASH と腸内細菌 | 谷合麻紀子・橋本 悦子 | 61~65 |

- | | | |
|------------------------------|---|---------|
| 9. NASH の動物モデル—病態よりみた妥当性と問題点 | 汐田 剛史 | 67~76 |
| 10. NASH における肝臓発生の実態 | 伊藤 義人・山口 寛二
榎村 敦詩・森口 理久
原 祐・瀬古 裕也 | 77~83 |
| 11. NASH の治療はどこまで進歩したか | | |
| (1) 栄養・運動療法による成果 | 松浦 文三 | 85~91 |
| (2) 抗酸化薬による治療 | 池嶋 健一 | 93~99 |
| (3) 糖尿病治療薬による治療 | 中牟田 誠 | 101~106 |
| (4) NASH 線維化に対する薬剤治療の試み | 赤羽たけみ・吉治 仁志 | 107~112 |
| (5) 世界で開発中の NASH 治療薬 | 荒瀬 康司・芥田 憲夫
川村 祐介 | 113~118 |

●Vol. 33 No. 2 自己免疫性膵炎(AIP)

- | | | |
|---|-------|---------|
| 巻頭言 | 岡崎 和一 | 145~147 |
| 1. 自己免疫性膵炎の疾患概念—IgG4 関連疾患としての AIP の位置づけ、1 型と 2 型の相違 | 川 茂幸 | 149~156 |

2. 病理からみた自己免疫性膵炎—その発生機序を含めて	能登原憲司	157～163	4. GERD の治療		
3. 自己免疫性膵炎の発症機序			(1) 内科治療	大島 忠之・富田 寿彦 應田 義雄・福井 広一 渡 二郎・三輪 洋人	295～301
塩川 雅広・児玉 裕三 妹尾 浩・千葉 勉	165～171		(2) 内科治療：難治例への対応	足立 経一・岡田真由美 沖本 英子・三代 知子	303～309
4. 自己免疫性膵炎の診断基準とその実際			(3) 外科治療	小熊 潤也・小澤 壯治 数野 暁人・新田 美穂 二宮 大和・谷田部健太郎	311～315
神澤 輝実・来間佐和子 千葉 和朗・田畑 拓久 小泉 理美・菊山 正隆	173～180		5. GERD 関連の話題		
5. 自己免疫性膵炎の膵外病変			(1) <i>H. pylori</i> 感染と GERD	深川 一史・山道 信毅	317～322
藤森 尚・伊藤 鉄英 三木 正美・立花 雄一 河邊 颯・小川 佳宏	181～187		(2) GERD と生活習慣病	内藤 裕二	323～328
6. EUS/EUS-FNA による自己免疫性膵炎の診断			(3) GERD と睡眠障害/睡眠時無呼吸症候群	岡 政志	329～333
岩井 知久・木田 光広 今泉 弘・奥脇 興介 山内 浩史・金子 亨 小泉和二郎	189～196		(4) GERD と呼吸器症状	川西 幸貴・前北 隆雄 加藤 順・井口 幹崇 吉田 岳市・北野 雅之	335～338
7. 自己免疫性膵炎の CT, MRI の特徴的所見			(5) Barrett 食道	天野 祐二・原田 英明 中原良太郎・村上 大輔 末廣 聡士・勝山 泰志	339～345
井上 大・戸島 史仁 米田 憲秀・北尾 梓 小森 隆弘・蒲田 敏文	197～202		●Vol. 33 No. 4 慢性便秘—新たな分類と病態・診断・治療		
8. IgG4 関連硬化性胆管炎と原発性硬化性胆管炎の鑑別			巻頭言	屋嘉比康治	365～366
内藤 格・大原 弘隆 中沢 貴宏・清水 周哉 林 香月・城 卓志	203～210		慢性便秘診療—新たな時代を迎えて		
9. 自己免疫性膵炎の初期治療			1. 定義・分類・診断基準	味村 俊樹	367～375
滝川 哲也・正宗 淳 菊田 和宏・菅野 敦 下瀬川 徹	211～217		2. 疫 学—有病率・家族内集積・性差・年齢・BMI・予後	千葉 俊美	377～382
10. 自己免疫性膵炎の長期経過と management			3. 病態生理	鹿野島健二・大久保秀則 中島 淳	383～386
平野 賢二・渡邊 健雄 前川 久登・中村 知香 中井 陽介・小池 和彦	219～226		4. 診 断	稲森 正彦・飯田 洋 藤田 浩司・日下部明彦	387～392
●Vol. 33 No. 3 GERD 診療 2018—現状と課題			5. 治 療		
巻頭言	木下 芳一	257～258	(1) 生活習慣	尾高 健夫	393～398
1. GERD の疫学	沢田 明也・藤原 靖弘	259～264	(2) 薬物治療全般	鳥居 明	399～404
2. GERD の病態	小泉英里子・岩切 勝彦	265～272	(3) 上皮機能変容薬	岡 政志	405～410
3. GERD の診断			(4) 漢方治療	眞部 紀明・鎌田 智有 春間 賢	411～416
(1) 自覚症状の評価	保坂 浩子・栗林 志行 下山 康之・河村 修 草野 元康	273～278	(5) プロバイオティクス	岡田 義清・穂苅 量太	417～420
(2) 内視鏡診断	浅岡 大介・竹田 努 永原 章仁	279～286			
(3) 胃食道逆流の評価	蘆田 潔・山下 博司	287～294			

(6) 浣腸, 坐剤, 摘便, 逆行性洗腸法	水城 啓	421~425	12. 小児における緊急内視鏡の注意点	中山 佳子	555~560
(7) 慢性便秘症の心理的異常, 薬物療法, 心理療法とバイオフィードバック	福土 審	427~434	13. 高齢者における緊急内視鏡の注意点	河口剛一郎・池淵雄一郎 八島 一夫・磯本 一	561~566
(8) 外科的治療	吉岡 和彦・徳原 克治	435~439	●Vol. 33 No. 6 ガイドラインに基づいた肝癌診療		
6. 二次性便秘の診断と治療	大久保秀則・冬木 晶子 中島 淳	441~446	巻頭言	國土 典宏	585~586
7. 高齢者の便秘	山本 貴嗣	447~451	1. 肝癌サーベイランス		
●Vol. 33 No. 5 緊急内視鏡の適応と実際			(1) サーベイランス対象の肝疾患	西村 貴士・飯島 尋子	587~592
巻頭言	高橋 寛	473~474	(2) 肝癌サーベイランス・診断アルゴリズム	建石 良介	593~597
1. 消化器診療における緊急内視鏡の役割	春田 純一・山口 丈夫 土居崎正雄・鷺見 肇 村手健太郎	475~480	(3) 肝癌サーベイランスのための画像検査	鶴崎 正勝・祖父江慶太郎 村上 卓道	599~604
2. 望ましい緊急内視鏡診療体制	落合 頼業・菊池 大輔 飯塚 敏郎・布袋屋 修	481~487	2. 肝癌治療のアルゴリズム	有田 淳一・赤松 延久 金子 順一・阪本 良弘 長谷川 潔	605~611
3. 上部消化管出血(静脈瘤)	中村 真一・岸野真衣子 山本 浩隆・小林亜也子 山本 果奈・徳重 克年	489~495	3. 肝癌治療の実際		
4. 上部消化管出血(非静脈瘤)	島岡 俊治・古川淳一郎 飯福 沙織・馬場由紀子 楠元 大岳・海田 正俊	497~503	(1) 肝切除術	久保 正二・竹村 茂一 田中 肖吾・新川 寛二	613~618
5. 小腸出血	中村 正直・大宮 直木 廣岡 芳樹・後藤 秀実	505~511	(2) 穿刺局所療法	南 康範・工藤 正俊	619~625
6. 大腸出血	青木 智則・山田 篤生 藤城 光弘・小池 和彦	513~520	(3) 肝動脈(化学)塞栓療法	渡谷 岳行	627~631
7. 腸閉塞	富永 健司・木村 隆輔 森 麻紀子・吉田 有輝 高橋 厚子・前谷 容	521~526	(4) 薬物療法	山下 竜也・寺島 健志 荒井 邦明・金子 周一	633~640
8. 脾臓	瀧川有記子・潟沼 朗生 高橋 邦幸・林 毅 矢根 圭・金 俊文	527~534	(5) 肝移植	坂本 和彦・永野 浩昭	641~646
9. 胆道	幡丸 景一・川路 祐輝 奴田 絢也・田村 崇 糸永 昌弘・北野 雅之	535~544	(6) 放射線療法	奥村 敏之・井垣 浩 武田 篤也・櫻井 英幸	647~652
10. 消化管異物	加藤 真吾・屋嘉比康治	545~550	4. 肝発癌予防	安井 豊・泉 並木	653~658
11. 消化管軸捻転	三上 達也・相原 智之 佐竹 美和・坂本 十一 東野 博・福田 眞作	551~554	5. 肝癌治療後のサーベイランス・再発予防・再発治療	波多野悦朗・中村 育夫	659~664
			●Vol. 33 No. 7 脾癌 update		
			I 疫学・基礎		
			1 脾癌診療ガイドライン 2016 年版:改訂ポイント	山口 幸二	702~709
			2 疫学	窪田 賢輔	710~714
			3 危険因子	本多 五奉・鈴木 裕 松木 亮太・小暮 正晴 横山 政明・杉山 政則	715~719
			4 脾嚢胞・IPMN と脾癌合併	多田 稔	720~722

3 P-NET	小泉 理美・菊山 正隆	899～905	5. 大腸癌外科的切除後のサーベイランス	中原 健太・石田 文生 一政 克朗・若村 邦彦 日高 英二・工藤 進英	1001～1008
4 IPMN	肱岡 真之・伊藤 鉄英 宮原 稔彦・山本 学 祇園 智信・吉田 佳弘	906～910	6. 中間期癌(interval cancer)について	草場 喜雄・鶴田 修 永田 務・徳安 秀紀 大内 彬弘・向笠 道太	1009～1014
5 その他の膵嚢胞性腫瘍	丹野 誠志	911～915	7. 大腸カルチノイド腫瘍(NET)摘除後の対応	関口 正宇・坂本 琢 関根 茂樹・高丸 博之 山田 真善・谷口 浩和 松田 尚久・斎藤 豊	1015～1023
6 まれな膵腫瘍の画像所見の特徴	奥野のぞみ・水野 伸匡 桑原 崇通・岩屋 博道 原 和生	916～923	8. リンチ症候群のサーベイランス—消化管を 中心に	千野 晶子・西川 雄輔 安江 千尋・井出 大資 斎藤 彰一・五十嵐正広	1025～1031
V トピックス			9. 家族性大腸腺腫症のサーベイランス	石川 秀樹	1033～1037
1 膵癌実験モデル	伊地知秀明	934～940	10. Cold polypectomy 後の適切なサーベイラ ンス間隔	中平 博子・竹内 洋司 松浦 倫子・東野 晃治 上堂 文也・石原 立	1039～1044
2 ロボット膵切除術	堀口 明彦・宇山 一朗 伊東 昌広・浅野 之夫 荒川 敏・志村 正博	941～945	11. 潰瘍性大腸炎の dysplasia	渡辺 憲治・西下 正和 横山 陽子・宮崎 孝子 樋田 信幸・中村 志郎	1045～1050
3 腹膜播種の化学療法—腹膜転移膵癌の化学 療法	里井 壯平・山本 智久 山本 壮・井上健太郎 柳本 泰明・松井 陽一	946～949	12. 非腫瘍性大腸ポリープ摘除後のサーベイラ ンス	久部 高司・石原 裕士 植木 敏晴	1051～1055
4 膵癌の癌性疼痛に対するEUSガイド下神経 叢ブロック(融解)術の有用性	宮田 剛・竹中 完 工藤 正俊	950～957	13. 正常大腸者のサーベイランス	木村 聖路	1057～1061
5 高齢者膵癌の治療	庄 雅之・赤堀 宇広 長井美奈子・西和田 敏 中村 広太・中川 顕志	958～962	●Vol. 33 No. 9 膵神経内分泌腫瘍 update		
●Vol. 33 No. 8 大腸腫瘍治療後のサーベイランス			巻頭言	木村 理	1085～1086
巻頭言	平田 一郎	973～974	1. 膵神経内分泌腫瘍の疫学	伊藤 鉄英・藤山 隆 宮原 稔彦・肱岡 真之 藤森 尚・米倉 由規 恒吉 正澄	1087～1091
1. 大腸腺腫摘除後のサーベイランス—JPSの結 果と海外ガイドラインとの比較も含めて	小林 望・松田 尚久 佐野 寧・藤井 隆広	975～980	2. 膵神経内分泌腫瘍の病理	笹野 公伸・笠島 敦子	1093～1097
2. SSA/P 摘除後のサーベイランス	佐野 互・佐野 寧	981～986	3. 膵神経内分泌腫瘍のがん遺伝子研究— PHLDA3 は膵神経内分泌腫瘍の運命を決定 する	富永 航平・陳 好 大木理恵子	1099～1109
3. 大腸側方発育型腫瘍(LST)摘除後のサーベ イランス	保田 和毅・岡 志郎 田中 信治・二宮 悠樹 林 奈那・茶山 一彰	987～994	4. 膵神経内分泌腫瘍と遺伝性疾患	松尾 真理	1111～1115
4. 早期大腸癌内視鏡摘除後のサーベイランス	南出 竜典・池松 弘朗 新村 健介・大野 康寛 矢野 友規	995～1000	5. 膵神経内分泌腫瘍のCT, MRI	山口 晴臣・佐野 勝廣	

6. 膵神経内分泌腫瘍の US, EUS	市川 智章	1117~1126
	脇岡 範・坂本 康成	
	近藤 俊輔・森実 千種	
	水口 安則・奥坂 拓志	1127~1138
7. インスリノーマの診断		
	五十嵐久人・植田圭二郎	
	藤森 尚・伊藤 鉄英	1139~1145
8. ガストリノーマの診断		
	河本 泉・細田 洋平	
	今村 正之	1147~1154
9. まれな機能性膵神経内分泌腫瘍の診断		
	中島 陽平・大塚 隆生	
	森 泰寿・仲田 興平	
	宮坂 義浩・中村 雅史	1155~1159
10. 核医学の膵神経内分泌腫瘍診断・治療への応用		
	小林 規俊・高野 祥子	
	金田 朋洋・市川 靖史	1161~1168
11. 膵神経内分泌腫瘍の手術治療		
	工藤 篤・小野 宏晃	
	小川 康介・光法 雄介	
	伴 大輔・田邊 稔	1169~1175
12. 膵神経内分泌腫瘍の化学療法		
	古瀬 純司	1177~1182
13. 膵神経内分泌腫瘍のバイオセラピー、分子標的治療薬		
	池田 公史・今岡 大	1183~1187
●Vol. 33 No. 10 十二指腸上皮性非乳頭部腫瘍の診療を巡ってー現状と課題		
巻頭言	藤城 光弘	1207~1209
1. 十二指腸上皮性非乳頭部腫瘍概論		
	神崎 洋光・岡田 裕之	1210~1216
2. 十二指腸上皮性非乳頭部腫瘍の臨床病理と分子生物学を巡って		
(1) 臨床病理概論		
	津山 翔・八尾 隆史	1217~1224
(2) 形質発現と悪性度		
	鳥羽 崇仁・岡本 陽祐	
	菊池 大輔・飯塚 敏郎	
	布袋屋 修・五十嵐良典	1225~1230
(3) 十二指腸癌の分子生物学的背景一何がどこまでわかっているのか？		
	小島 洋平・鈴木 裕	
	阪本 良弘・正木 忠彦	
	森 俊幸・阿部 展次	1231~1238
3. 十二指腸上皮性非乳頭部腫瘍の診断を巡って		
(1) 内視鏡診断		
	辻 陽介・藤城 光弘	
	小池 和彦	1239~1244
(2) NBI 併用拡大内視鏡		
	辻 重継・土山 寿志	1245~1252

4. 十二指腸上皮性非乳頭部腫瘍の治療を巡って		
(1) 十二指腸上皮性非乳頭部腫瘍に対する外科治療ー縮小手術を中心に		
	阿部 展次・橋本 佳和	
	竹内 弘久・鈴木 裕	
	阪本 良弘・森 俊幸	1253~1262
(2) EMR		
	山本 頼正	1263~1268
(3) ESD		
	落合 康利・後藤 修	
	中山 敦史・加藤 元彦	
	前畑 忠輝・矢作 直久	1269~1276
(4) 浸水下 EMR		
	井上俊太郎・山崎 泰史	
	上堂 文也	1277~1280
(5) 十二指腸の cold snare polypectomy (D-CSP)		
	滝沢 耕平・細谷 和也	
	角嶋 直美・川田 登	
	吉田 将雄・小野 裕之	1281~1287
(6) 偶発症予防対策：胆膵ドレナージと PGA シート		
	滝本 見吾・江坂 直樹	
	遠藤 文司・水本 吉則	
	勝島 慎二・玉置 大	1289~1294
(7) 偶発症予防対策：OTSC		
	村元 喬・大圃 研	
	港 洋平・里館 均	
	松橋 信行	1295~1306
●Vol. 33 No. 11 消化器病漢方治療ー理論と実践		
巻頭言	屋嘉比康治	1327~1328
1. 「証」と「症状」と「診断」いずれを優先するか？		
	佐藤 弘	1329~1334
2. 総論：消化器疾患一どのように処方するか		
(1) 東洋医学の消化器疾患治療法		
	中村東一郎	1335~1339
(2) 西洋医学からみた漢方薬治療法		
	中田 佳延・新井 信	1341~1347
3. 理論：漢方薬作用機序の科学的解明		
(1) 六君子湯		
	武田 宏司・大久保直登	
	中川 宏治・大西 俊介	
	藤塚 直樹・服部 智久	1349~1356
(2) 大建中湯		
	河野 透	1357~1364
(3) 半夏瀉心湯		
	上園 保仁・宮野加奈子	1365~1369
(4) 潤腸湯/麻子仁丸		
	沼田 朋大・井上 隆司	1371~1376

4. 実践：漢方薬治療の実際—このように治療する		
(1) 食欲不振—フレイルも含めて	宇都奈々美・安宅 幸司 網谷 東方・乾 明夫	1377～1385
(2) 胃食道逆流症 (GERD) や嚥下障害	川見 典之・岩切 勝彦	1387～1392
(3) 胃もたれ, 機能性ディスペプシア	富永 和作	1393～1400
(4) 便秘・下痢・過敏性腸症候群	眞部 紀明・中藤 流以 藤田 穰・楠 裕明 鎌田 智有・畠 二郎 春間 賢	1401～1407
(5) 炎症性腸疾患	及川 哲郎	1409～1414
(6) 外科領域における漢方治療	今津 嘉宏・堀口 速史 宮田 直輝・村上 智洋 廣津 周・田中 慧 田邊 真帆・浜野 愛理 藤崎 章子	1415～1420
(7) がん化学療法副作用軽減と支持療法	元雄 良治	1421～1427
●Vol. 33 No. 12 消化管粘膜下腫瘍 (SMT) の診療		
巻頭言	西田 俊朗	1445～1446
1. 消化管粘膜下腫瘍の概念とその鑑別疾患	新美 恵子・皆月ちひろ 石橋 嶺・田村 直樹 山道 信毅・藤城 光弘 小池 和彦	1447～1453
2. 消化管粘膜下腫瘍における分子異常—GIST を中心に	廣田 誠一	1455～1460
3. 消化管粘膜下腫瘍の病理診断	河内 洋	1461～1468
4. 消化管粘膜下腫瘍の画像診断		
(1) 通常内視鏡, EUS, CT, MRI	吉永 繁高・三宅 基隆	1469～1478
(2) PET, PET-CT	倉田 精二・角 明子 椿 史裕・藤本 公則 安陪 等思	1479～1484
5. 消化管粘膜下腫瘍に対する EUS-FNA の実際	奥野のぞみ・水野 伸匡 桑原 崇通・松本 慎平 原 和生	1485～1492
6. 消化管粘膜下腫瘍に対する直視下生検法の実際	片岡 幹統・海老沼浩利 樋口 肇・梅田瑠美子 宮田 直輝・高橋 冴子	1493～1499
7. 消化管粘膜下腫瘍に対する内視鏡治療 (EMR, ESD)	土山 寿志・中西 宏佳	1501～1507
8. 経口内視鏡的粘膜下腫瘍核出術 (POET) の適応と実際	井上 晴洋・鬼丸 学	1509～1514
9. LECS の適応と実際	樋口 和寿・後藤 修 柿沼 大輔・藤田 逸郎 貝瀬 満・岩切 勝彦	1515～1520
10. 消化管粘膜下腫瘍に対する外科手術 (内視鏡外科手術, 開腹開胸手術)	橋本 佳和・阿部 展次 高木 泰介・大木亜津子 竹内 弘久・長尾 玄	1521～1531
11. 食道でみられる粘膜下腫瘍	島田 英雄・西 隆之 富田さくら・千野 修 小澤 壯治・幕内 博康	1533～1540
12. 胃でみられる粘膜下腫瘍	岩室 雅也・岡田 裕之	1541～1548
13. 十二指腸でみられる粘膜下腫瘍	角嶋 直美・吉田 将雄 川田 登・滝沢 耕平 松林 宏行・小野 裕之	1549～1554
14. 空腸, 回腸でみられる粘膜下腫瘍	森川 昇玲・矢野 智則	1555～1559
15. 大腸でみられる粘膜下腫瘍	石岡 充彬・井出 大資 千野 晶子・斎藤 彰一 五十嵐正広	1561～1568
●Vol. 33 No. 13 肝線維化—診断を超えて		
巻頭言	佐々木 裕	1585～1586
1. 肝線維化, 肝硬変の病理診断	全 陽	1587～1592
2. 肝線維化の非侵襲的評価方法		
(1) FibroScan®	辰巳 明久	1593～1598
(2) 超音波エラストグラフィ (FibroScan® 以外)	小林奈津子・飯島 尋子 吉田 昌弘・西村 貴士 西口 修平・廣田 誠一	1599～1604
(3) MR エラストグラフィ	中島 淳・今城 健人 小林 貴・小川 祐二 結束 貴臣・本多 靖 米田 正人・斎藤 聡	1605～1611
(4) バイオマーカーによる肝線維化診断	朝比奈靖浩	1613～1620
(5) 慢性肝疾患における肝線維化予想式	小野 正文・角田 圭雄 越智 経浩・宗景 玄祐 西原 利治	1621～1628

3. 肝線維化と肝発癌リスク(臨床)	八橋 弘	1629～1636	7. 肝線維化は最強の NASH 予後決定因子か	角田 圭雄・小野 正文	
4. 肝線維化の動物モデルー肝発癌との関連を含めて	汐田 剛史	1637～1644		藤井 英樹・徳重 克年	
5. C 型慢性肝炎 SVR 後の肝線維化・肝発癌リスクの変化	中込 良・建石 良介		8. 肝線維化改善治療と肝再生医療の現状と展望	中島 淳・米田 政志	1659～1666
	小池 和彦	1645～1650		土屋 淳紀・小川 雅裕	
6. 抗ウイルス治療による B 型慢性肝炎の肝線維化改善	保坂 哲也	1651～1657		野尻 俊介・渡邊 貴之	
				竹内 卓・寺井 崇二	1667～1674

|||||内視鏡の読み方(連載)|||||

Vol. 33 No. 1	
終末回腸に多発する潰瘍・狭窄により再発性腸閉塞をきたした回腸結核の1例	
鈴木 将大・三井 啓吾 貝瀬 満・岩切 勝彦	124~128
Vol. 33 No. 2	
白斑が治療効果と 관련된 した好酸球性食道炎の一例	
中村 康宏・菊池 大輔 飯塚 敏郎・栗林 泰隆 井下 尚子・布袋屋 修	237~240
Vol. 33 No. 3	
胃サルコイドーシス	
福馬有美子・菊池 大輔 飯塚 敏郎・布袋屋 修	351~354
Vol. 33 No. 6	
らせん状収縮(corkscrew appearance)を契機に, Jackhammer 食道と診断された2例	
星野慎太郎・川見 典之 貝瀬 満・岩切 勝彦	672~676

|||||検査値の読み方(連載)|||||||

Vol. 33 No. 1		
自己免疫性肝炎における自己抗体—抗平滑筋抗体測定		
水田 敏彦・澁木 太郎	129	133
Vol. 33 No. 2		
長期の核酸アナログ製剤内服にてネフローゼ症候群が完治した B 型慢性肝炎の 1 例		
正木 尚彦・柳瀬 幹雄	247	250
Vol. 33 No. 4		
突然の意識障害を示した若年肝障害の 1 例		
中牟田 誠	452	456
Vol. 33 No. 5		
<i>Fusobacterium</i> によると考えられ、肺血栓塞栓症を合併した、健常男性に生じた肝膿瘍の 1 例		
池田 朱里・加藤 知爾		

|||||薬の知識(連載)|||||

Vol. 33 No. 1

クローン病治療薬 プデソニド(ゼンタコート®)
鈴木 康夫 134～138

Vol. 33 No. 2

リナクロチド(リンゼス®錠)
中島 淳 241～246

Vol. 33 No. 3

ジメンシー®配合錠(ダクラタスビル塩酸塩/アス
ナブレビル/パクラブビル塩酸塩)
芥田 憲夫 355～358

Vol. 33 No. 4

オピオイド誘発性便秘症治療薬 ナルデメジント
シル酸塩(スインプロイク®)
樋口 雅樹・朴 成和 463～465

Vol. 33 No. 5

ウステキヌマブ(ステラーラ®)
木村佳代子・金井 隆典 567～570

Vol. 33 No. 6

ゴリムマブ(シンポニー®)
仲瀬 裕志 677～679

Vol. 33 No. 8

レゴラフェニブ(スチバーガ®)
山下 竜也・寺島 健志
荒井 邦明・金子 周一 1073～1076

Vol. 33 No. 10

ニボルマブ(オプジーボ®)—治癒切除不能・再発
胃癌の治療法として
東山 量子・加藤 健
朴 成和 1312～1315

|||||手技の解説(連載)|||||

Vol. 33 No. 3

留置スネアによる大腸憩室出血の結紮止血法
奈良坂俊明・坪 大輔
溝上 裕士 346～350

Vol. 33 No. 13

Endocyto を使った内視鏡診断の実際：食道
熊谷 洋一・川田 研郎
田久保海誉・相田 順子
持木 彫人・石田 秀行 1675～1680

|||||ESD—手技の工夫(連載)|||||

Vol. 33 No. 10

Magnetic anchor を使用した ESD
松崎 一平・服部 昌志
中澤 三郎 1316～1318

Vol. 33 No. 12

胃 ESD 後粘膜欠損の留置スネアとクリップによ
る縫縮術
阿部清一郎・小田 一郎
野中 哲・鈴木 晴久
吉永 繁高・斎藤 豊 1569～1572

|||||講 座(連載)|||||

Vol. 33 No. 2

穿孔部・瘻孔部の内視鏡的閉鎖技術：現状と展望
森 宏仁 227～232

|||||EUS, EUS-FNA 診断・治療—Tips & Tricks(連載)|||||

Vol. 33 No. 6

3 コンベックス型 EUS による胆膵標準描出法
(1)
木田 光広・金子 亨
山内 浩史・奥脇 興介
岩井 知久・菊地 秀彦
今泉 弘 680～686

Vol. 33 No. 8

3 コンベックス型 EUS による胆膵標準描出法
(2)
木田 光広・金子 亨
山内 浩史・奥脇 興介
岩井 知久・菊地 秀彦
今泉 弘 1067～1072

||||Dr. 平澤の上部消化管内視鏡教室—この症例にチャレンジしてください(連載)|||

Vol. 33 No. 1 SMT 様の病変	平澤 俊明・藤崎 順子 河内 洋	119～123	Vol. 33 No. 9 人工知能が見つけた胃癌	平澤 俊明・藤崎 順子 河内 洋	1193～1197
Vol. 33 No. 2 黄色調の胃腫瘍	平澤 俊明・藤崎 順子 河内 洋	233～236	Vol. 33 No. 11 特殊型胃癌	平澤 俊明・藤崎 順子 河内 洋	1429～1432
Vol. 33 No. 4 これは過形成性ポリープ？	平澤 俊明・藤崎 順子 河内 洋	457～461	Vol. 33 No. 13 <i>Helicobacter pylori</i> 未感染症例のポリープ	平澤 俊明・河内 洋 藤崎 順子・榎 信廣	1681～1686
Vol. 33 No. 6 多発する胃腫瘍	平澤 俊明・藤崎 順子				

||||学会だより|||

Vol. 33 No. 8 第 104 回 日本消化器病学会総会	山下 竜也・金子 周一	1038	Vol. 33 No. 11 JDDW2017 第 21 回 日本肝臓学会大会	榎本 信幸	1370
Vol. 33 No. 9 第 95 回 日本消化器内視鏡学会総会	井上 晴洋	1098	Vol. 33 No. 13 第 73 回 日本消化器外科学会総会	矢永 勝彦	1658
Vol. 33 No. 10 第 54 回 日本肝臓学会総会	持田 智	1288			

||||特別寄稿|||

Vol. 33 No. 10 災害時における IBD 患者への対応：ストーマ患者への対応を中心に	内野 基・岡山カナ子 池内 浩基	1204～1205
---	---------------------	-----------

『臨牀消化器内科』編集委員会

編集委員：小池 和彦*, 五十嵐正広, 一瀬 雅夫, 杉山 政則, 藤城 光弘, 屋嘉比康治
(*：学術アドバイザー)
編集協力者：多田 正大, 樫田 博史
ゲストエディター：木田 光広(No. 2)
歴代編集委員：岡 博, 島津 久明(故人), 玉熊 正悦(故人), 棟方 昭博, 市倉 隆,
中村 孝司(故人), 丹羽 寛文(故人), 田尻 久雄